

絆きずなが守る棚田



庵町在住の瀬川修さんご夫妻

市街地から国道160号線を車で走ること約15分。七尾湾を左手に見ながら、大田町の交差点を右折する。殿・郷橋・沢野と3つのトンネルをくぐり抜け、しばらく進むと目の前に富山湾が広がってくる。このあたりは、庵町の百海地区。海に突き当たったところで、左折すると防波堤の上で、のんびりと釣りを楽しむ人がいる。

さらに、200メートルほど行くと、棚田への登り口にたどり着く。百海の集落の中に入るように登っていくと、空を見上げるほどの急勾配の坂道が続く。その途中、立ち止まり息を整えて後ろを振り返ると、碧い海と黄金色の田んぼが広がっている。強い日差しの中にも、爽やかな風が吹く、秋を感じる一瞬である。日差しを受けて、家々の能登瓦の波模様と富山湾の揺れる波がキラキラと輝き、一体となって見える。空一面には、いわし雲が浮かんでいる。

富山湾を望む百海どうみの棚田

地域で守る棚田

坂道の途中で、農作業をしている男性を見かけ、声をかけた。この近くに住む瀬川修さんである。瀬川さんの田んぼには、稲架が組まれており、その半分ほどは、刈り取られた稲が掛けられている。

「今週末、かあちゃんが残りの稲を刈って、掛ける予定や。健康のために慌てんとゆつくりやつとる。」と気さくに話してくれた。

わたしの小さい頃には、まちのあちこちでこんな風景を見ることができたのにと話すと、瀬川さんは、少し淋しそうな表情をした。「わたしの若いときは、苦労は買ってでもせいと言われたなあ。でも、

今の若いもんは、楽しんで稼ぎたいやろ。」と言った。確かにそのとおりであり、耳の痛い話である。

そう話す瀬川さんの横顔には、この地で先代から受け継いできた田を守ってきたという誇りが感じられた。

瀬川さんの話では、この百海の棚田を守っているというイメージが十数名いるという。農作業が忙しいときには、お互いに助け合っているという。

そして、この上にある伊影山神社への遊歩道でもある坂道の草刈りも地域の人々が、自主的にやっている。きれいに草刈りされた道は、地元のみなさんのおかげである。神社の境内には、石川県指定天

然記念物のイチヨウの木がある。

「年間結構な人が、神社の大イチヨウの木を見に登っていくからな。」と瀬川さんは話した。

大切にしたい絆

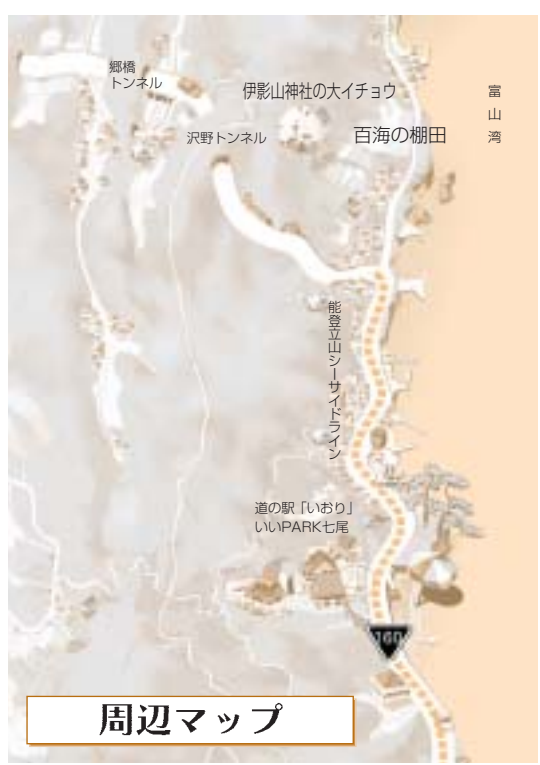
ここには、日本の原風景とも言える田舎らしい景色がある。地元の人々は、「昔は、この棚田も輪島の千枚田に負けないくらいやった。」と話す。

しかし、この景色はふるさとを愛する気持ちだけでは、守っていくことは出来ない。みんなですべて守っていくという強い気持ちや絆が、必要である。絆には、夫婦、親子、地域の人々、仲間、友達など、いろいろなものがある。これらの絆は、人間が生きていく上で、とても大切なものである。人の温かみを感じられることが、少なくなつたと言われる今日、田舎にはまだまだこんな強い絆が残っている。

この絆を大切にし、いつまでも、この棚田が七尾の景色として残されていくことを願いたい。



今では、整備され、車が通れるようになった道。以前は、1メートル足らずの幅で、農作業するときは、道具を背負い登ったそうである。



周辺マップ

伊影山神社のイチヨウ (石川県指定天然記念物)

大きさは、胸高囲11メートル、樹高26メートル、樹齢500年以上と言われている。

秋には、黄色い葉をつけた大イチヨウが、定置網の山ため(指標)とされている。

長年の風雪に耐えてきた樹の幹は、深い溝を刻み、古木としての迫力を感じさせる。七尾市の文化財から引用

